

# ディケンズ・フェロウシップ日本支部 THE JAPAN BRANCH OF THE DICKENS FELLOWSHIP

## 令和 8 年度春季総会プログラム SPRING CONFERENCE 2026 PROGRAMME

日時：2026 年 6 月 20 日 (土)  
Date: 20 June 2026 (Sat)

会場：西南学院大学  
(〒814-0002 福岡県福岡市早良区西新 6-2-92)

Venue: Seinan Gakuin University  
(6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka)

総会会場 General Meeting room: 1-304 (1号館 304 教室)  
理事会会場 Trustees Meeting room: 1-205 (1号館 205 教室)



<https://victorianweb.org/art/illustration/phiz/2cities/7b.html>

11:00 理事会 Board of Trustees Meeting

---

13:00 開会 Opening Address

松本靖彦 (ディケンズ・フェロウシップ日本支部長)  
Matsumoto Yasuhiko (President, The Japan Branch of the  
Dickens Fellowship)

総会 General Meeting

---

---

13:35 – 14:50

特別講演 Special Lecture

司会：鵜飼信光（九州大学） Ukai Nobumitsu (Kyushu University)

講演者：鈴木結生（作家） Suzuki Yui (author)

「ホワット・ザ・ディケンズ！ーディケンズの愛読者たち」  
“What the Dickens! — Becoming a Reader of Dickens through His Admirers”

---

15:00 – 17:00

シンポジウム Symposium

「フランス革命とテキストの交差ーディケンズ『二都物語』（1859）とユゴー『九十三年』（1874）におけるキリスト教・神話・思想」

“The French Revolution and the Intersection of Texts: Christianity, Myth, and Thought in Charles Dickens's *A Tale of Two Cities* and Victor Hugo's *Quatrevingt-Treize*”

司会・コメンテーター：三宅敦子（西南学院大学） Miyake Atsuko (Seinan Gakuin University)

講師：篠原涼子（西南学院大学修士課程） Shinohara Suzuko

(Seinan Gakuin University master's course)

「『二都物語』に使われた引喩とその効果について」

“Exploring Allusions in *A Tale of Two Cities*”

講師：和田光昌（西南学院大学・19世紀フランス文学） Wada

Mitsumasa (Seinan Gakuin University)

「飛翔する魂、浮遊する93年ーヴィクトル・ユゴー『九十三年』における子どもたちの聖バルテルミー」

““Souls fly off; '93 still hovers”: The Children's Saint Bartholomew in Hugo's *Quatrevingt-Treize*”

---

17:30

閉会の辞 Closing Address

宮丸裕二（ディケンズ・フェロウシップ日本支部副支部長）  
Miyamaru Yuji (Vice President, The Japan Branch of the Dickens Fellowship)

---

18:00 懇親会 Convivial Party

会場: グランドマスターズカフェ（ザ・レジデンシャルスイート・福岡1階）

〒814-0001 福岡県福岡市早良区百道浜 1-3-70 （\*大学から北に徒歩10分）

Tel: 050-5492-0707)

会費: 6,000円



西南学院大学アクセスマップ

<https://www.seinan-gu.ac.jp/accessmap.html>



総会会場 1号館 304 教室  
 理事会会場 1号館 205 教室

特別講演

「ホワット・ザ・ディケンズ！ - ディケンズの愛読者たち」  
“What the Dickens! — Becoming a Reader of Dickens through His Admirers”

鈴木結生

『ゲーテはすべてを言った』で第172回芥川賞を受賞された鈴木結生さんの『携帯遺産』は、ディケンズの愛読者としてのヴァージニア・ウルフ、アンネ・フランク、大江健三郎をモチーフとして書かれた作品です。必ずしもディケンズの小説の良き読者ではなかったと自認される鈴木さんに、彼ら彼女らを通して、いかにしてディケンズを愛するようになったか、ということをお話しいただきます。

シンポジウム

「フランス革命とテキストの交差 -  
ディケンズ『二都物語』（1859）とユゴー『九十三年』（1874）における  
キリスト教・神話・思想」

“The French Revolution and the Intersection of Texts: Christianity, Myth, and Thought in  
Charles Dickens’s *A Tale of Two Cities* and Victor Hugo’s *Quatrevingt-Treize*”

ディケンズは、1851年7月16日付けのジャーナリスト John Richard Robinson への手紙でユゴーについて、「彼の才能を心から賞賛し個人的に大いに尊敬する」人物であると評している。また、作家のアンデルセンがディケンズと初めて会った邸宅の主であるブレッシントン伯爵夫人マルグリット・ガーディナー宛ての1847年1月27日の別の書簡で、ディケンズはユゴー宅訪問について言及し、ユゴーの家を「骨董屋（“an old curiosity shop”）のよう」だと記している。このような接点があったディケンズとユゴーはともに、フランス革命を題材とした小説『二都物語』と『九十三年』を遺した。どちらもフランス革命を主題としているが、細かな点では相違がみられる。

まず、出版時期が異なる。ディケンズの『二都物語』が1859年であるのに対し、ユゴーの『九十三年』は1874年と、15年ほど開きがある。小説の舞台と描かれる歴史的出来事は『二都物語』が1775年から1793年にかけてのフランスとフランス革命である一方、『九十三年』は同じフランス革命でも、反フランス革命と位置付けられる1793年のヴァンデの反乱に焦点を当てている。

本シンポジウムでは、19世紀フランス文学が専門の和田光昌を発表者の一人に迎え、司会・コメンテーターの三宅敦子が最近の聴衆にはなじみが薄いと思われる二つの小説を簡単に聴衆に紹介

することでそれぞれの発表をつなぎ、二人の発表者による英仏のフランス革命表象を比較検討したい。

「『二都物語』に使われた引喩とその効果について」  
“Exploring Allusions in *A Tale of Two Cities*”

篠原涼子

チャールズ・ディケンズの『二都物語』は同時代の歴史家であり評論家のトマス・カーライルの『フランス革命史』を参照していると言われ、しばしば比較される。前者はフィクションであり、後者はノンフィクションである。本発表では、両者の違いを念頭に置きながら、ディケンズのフィクションである小説『二都物語』に用いられている、特に聖書、シェイクスピア、ギリシア神話、そして寓話に注目する。それらの物語が小説に与える効果と読者への影響を、特にヨーロッパ文学の伝統技巧である「引喩」(allusion)に焦点を当てて分析することで、『二都物語』に描かれるフィクションとしてのフランス革命の持つ意味を探りたい。ディケンズの重層的な意味合いを持つ小説『二都物語』は、引喩を有効的に使うことで、読者の脳裏にフランス革命と物語の関連性を連想させ、フランス革命が与える恐怖やイギリスへの影響を鮮明に意識させることに成功していると考えられる。『二都物語』は歴史小説という枠組みを超えたフィクション小説である。

「飛翔する魂、浮遊する 93 年 —

ヴィクトル・ユゴー『九十三年』における子どもたちの聖バルテルミー」

““Souls fly off; '93 still hovers”: The Children's Saint Bartholomew in Hugo's *Quatrevingt-Treize*”

和田光昌

ヴィクトル・ユゴー最後の小説『九十三年』(1874)は、反フランス革命の戦いとして知られるヴァンデの反乱を題材にした、フランス革命についての思想小説である。題名の 93 は 1793 年を意味し、ルイ 16 世の処刑で始まり、ロベスピエールの恐怖政治がつづく年である。歴史の「劇薬」としての革命の力が最も強かった時期を背景に、伝統的にローマ教会への忠誠心が高かった地域の農民たちが、フランス革命で排除された貴族や宣誓拒否聖職者に導かれて立ち上がったものたち(王党派)が、パリの革命政府から派遣された政府軍(とそれを監視する派遣議員)と戦い、敗れていくまでが描かれている。

このように『九十三年』では、王党派と革命派(すなわち共和派)の対立が描かれるが、特徴的なのは、どちらか一方に与することなく、両者の和解がはかられていることである。それは結末によくあらわれている。革命軍の指揮官でありながら、王党派軍首領のラントナックを処刑直前に助けたゴーヴァンと、その行為を許せず躊躇なく死刑を宣告し、その執行と同時に自殺した派遣議員のシムルダンの二人の魂が「姉妹」のように天へ飛翔していく場面である。しかし、この天上的な解決は、その直前にある、子どもたちの「聖バルテルミー」の場面によって補強されると同時に留保されているように思われる。ヴァンデに生まれながら共和国の養子になり、人質として貴族の館

—図書室—に幽閉された子どもたちが、共和国軍の城攻めにより迫り来る炎にも気づかず、無邪気にこの世に一冊しかない貴重な書物を破りちぎり、粉々にして風のなかに散逸させる。この歴史の紙片の浮遊は、人類史あるいは個人史の問題としてフランス革命をどう考えるか、初期から取り組みながら作品としてまとめたかたちを与えることのできなかったユゴーの最後の揺らぎのあらわれではないか。その意味で『九十三年』の主人公はフランス革命なのである。